

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	龍谷大学図書館蔵『保元物語』近世初期写本翻刻（三）
Author(s)	広島大学日本語史研究会,
Citation	論叢 国語教育学 , 20 : 33 - 43
Issue Date	2024-07-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/55339">10.15027/55339</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/55339">https://doi.org/10.15027/55339</a>
Right	
Relation	



龍谷大学図書館蔵『保元物語』近世初期写本 翻刻(三)


広島大学 日本語史研究会

本稿は、龍谷大学図書館貴重書庫に蔵される『保元物語』(写字台 913.39 / 3W)の翻刻(三)である。翻刻(一)は「論叢 国語教育学」第19号(令和五年七月刊)に、翻刻(二)は「国語教育研究」第52号(令和六年三月刊)に公表した。本書の書誌・略解説は、翻刻(一)を御覧頂きたい。

翻刻の許可を頂いた龍谷大学図書館に対し、心中より御礼申しあげる。(以上、佐々木 勇 記)

## 凡例

一、本翻刻は、龍谷大学図書館蔵『保元物語』(写字台 913.39 / 3W)を、原本の行取りで、現行の字体に改めたものである。仮名遣いも、原本のままとした。

一、促音・舌内入声音に使用される  は、「ツ」で示した。

一、虫損等で欠損した文字を画面から推読した場合は、「」に入れた。

一、本翻刻は、藤井日羽・舘林佑樹・源さちあ・元山美乃里・堀邊隆晴・宮崎翔太・荒尾佳澄・高藤友菜・長谷川木香・森本泉美・

下賀海弘・田村慎之介・平原朋美・三戸部さくらで作成した。  
なお、翻刻データの入力は、藤井日羽・元山美乃里・荒尾佳澄・高藤友菜・森本泉美が行い、佐々木勇が確認・修正した。

## 翻刻

(四十八才)

- 1 じやがゆんぜいにはよもかなひ候はしかたきのよ
  - 2 するをあひまちて日数を送り候はゝじんばのつ
  - 3 かれにて候此御所をは清盛に守護せさせ候てよ
  - 4 しともにおゐてはまかりむかッてせうぶを決せん
  - 5 と申ければ信西詩哥くわんげんは臣家のたし
  - 6 なむ所なれはなをもてくからからすいはむや武
  - 7 勇のみちにおゐてをやしよせん君も臣も汝を
  - 8 たのみおほしめす也せんする時は人をせひしの
  - 9 ちにする時は人にせいせらるといふかッにのらん  
(四十八ウ)
- 1 と申条もツとも神妙也とくくまかりむかへと仰

2 られければよしともかしこまでまかり出ぬ信西がお  
3 ほせのことはよしともが返たういつれも／＼人と  
4 耳をおどろかすよしともほんぢんに歸て其日は  
5 家につたへたる八龍といふよろひをぞきたりけ  
6 る八りうとはれうを八一ツのいたにうつて付たる  
7 その名なりかげなる馬のふとくたくましきに  
8 しるふくりんのくらをいてすてに手うちかけ  
9 てのらんとしけるが手にぬき入てもちたるむ

(四十九才)

1 ちをと「て」ぢんのまへにたちたる車のたてむ  
2 ちのやうにとちつけさせければ人はは何事  
3 やらんとおもひけるによしとも申けるはゆみ  
4 やとるならひかッせんのはにあひむかッて  
5 命をすてふずる事は一定也昇殿は日ころの  
6 しよまう也た々今御ゆるしありとは誰かはしるへきも  
7 しいきのこりたるしそん一人もあらはわかち々昇  
8 殿はゆるされけり車にたてむちありとみせ  
9 むため也と申ければまことに家をおもひしそん  
(四十九才)  
1 をかへり見るならひかくこそ有べけれどて皆人  
2 あるひは涙をもよほしけりよしとも馬にうち  
3 乗て日ころはかッせんすといへとも朝威におそ  
4 れ奉ておもふやうにはふるまはす今度は大しやう  
5 ぐんを承りげいをほとこし名をこうたいにと々  
6 めんとてゆみとりなをしあふぎひらきつが

7 つてひかへたる氣しきあはれ大将軍やとそ見  
8 ぬしよしともにしたかふつはものともたれ／＼  
9 そめのと「か」まだ次郎まさきよかはちの源太

(五十才)

1 あふみのくにハはさ々木三郎やしまのくわんじや  
2 みのくくにハはひらの平太よしの太郎おはりの  
3 くにハはあつたの大ぐうじははしうとなれば  
4 我身はのほらすいゑのこらうどうをさしのほ  
5 すみかわの國には設薬兵藤三足利くわんじや  
6 どうたふみの國には横地勝田井八郎するかの國に  
7 は入江馬允和良品十郎興津四郎蒲原五  
8 郎いづの國には狩野工藤四郎同五郎さかみの  
9 國には太庭へいだけけよし同三郎かけちか山う

(五十才)

1 ちの須藤ぎやうぶのぜうよしみちしそくたきぐ  
2 ちとしみち海老名源八かけさた波多野小次郎  
3 よしみちむさしの國には豊嶋四郎箱田次郎  
4 かわかみの大郎別符マ次郎ならの三郎玉井四郎  
5 長井斎藤別當実盛同さねとし悪次平山しろ  
6 の太郎同次郎久下ごんのかみおかべの六野太小平  
7 かねこの十郎同与一仙波十郎山くち六郎かは  
8 ごしの大郎あはのくにハは奥新はんぐわん義  
9 康百騎隠岐はんぐわん惟俊百騎つこう二  
(五十一才)  
1 千三百余騎とぞ聞えし下つけのかみ二条か

- 2 わらへ出あきのかみきよもりは三条かわらへいづ
- 3 其外思ひ／＼にかけ出にけりうの時にたかまつ殿
- 4 より東三条の御所へ行 幸なる此御所へはぶんな
- 5 いせばくてひんぎあしかりなんとて御ようい
- 6 のため也主上 は御直衣にて腰輿にめす関白殿
- 7 神璽寶劔とて御こしに入らる関白殿内大臣
- 8 実義さへもんのかみ基真左衛門督公能頭中将
- 9 公親左中将 みつたゞせうなごん入道しんせいな

(五十一ウ)

- 1 かづかさのぜう重盛此人とそまいられる仙洞に
  - 2 は左大臣殿ためよしをめしてかツせんの次第いか
  - 3 やうなるへきそと仰られければはんくわん申けるは
  - 4 ためよしみかたにさんかうつかまつり候うへはちう
  - 5 をいたすへく候それ猶かなひ候はすは御幸を東國へ
  - 6 なしまいらせてあしがらはこねをきりふさぎと
  - 7 う國のぢう人等をもよほし候てなとかしはらくさ
  - 8 らへで候へき世中しつまり候らひなは京都へ入ま
  - 9 いらせ候はやと申ければ左大臣殿ためよしが条と
- (五十二オ)
- 1 申状しんべうなりといへとも御幸を他所へなしま
  - 2 いらする事は有へからすたゞせんするところ
  - 3 かツせんのちうをいたしてくんこうのしやうにあ
  - 4 きみちよと仰られければ庭上にひぎまつき
  - 5 仰をうけ給てまかり出ぬさ大臣殿むしや所ち
  - 6 かひさをめしてだいのけいき見てまいれ是

- 7 よりよするをまたるゝか又あれよりよせらるへき
- 8 か事の躰きと見て参れとて御むまやの
- 9 御馬を給りくらをくにおよはすくつわはかり

(五十二ウ)

- 1 にてはせけるか程なくかへりまいりて馬の
- 2 ゆくゑもしらずいきもつぎあへずあはてた
- 3 るけしきにて御所に参てあなおびたゞしや
- 4 たゞ今大せいうんかのごとくそむかひ候そやと申
- 5 はてねば二条かわらにときをどつとぞつく
- 6 りたる新院のつはものうへを下にさうどうす其
- 7 時ためともてきのうはてをうたんと申つるはこゝ
- 8 候／＼と申せ共みゝにきゝ入るものもなしはん
- 9 くわんの子どもわれさきをかけんとあらそひ

(五十三オ)

- 1 けるためとも申けるはいくさのさきをかけん
  - 2 する事はかならずあにおとゝにもよるへからす
  - 3 たゞきりやうによるへし今度におあてはため
  - 4 ともまづさきをかけて君のげんざんにいらん
  - 5 と存候へ共さらぬだにもためともをはかた／＼
  - 6 に御心をなしまいらせぬびろうのものなりといふ
  - 7 御さたにて候なればよう候たれ／＼もかけさせ
  - 8 給ひ候へこはく候はんする所をはいくたびもた
  - 9 めともにまかせ給へ千騎万騎なりとも一はう
- (五十三ウ)
- 1 におあてはかけやふツてげんざんにいらんとて

2 うつすへてこそひかへたれ四郎左衛門尉 よりか  
3 た三十余騎にてあに下つけのかみのせいのの中へ  
4 をめいてかけ入義朝左衛門尉あますなくめやう  
5 つとれやとげぢしけれ共手にもたまらすかけま  
6 はる又門をもやふられじと思ひけんもとのぢ  
7 むへぞひきしりぞく下つけのかみやすからぬこ  
8 と也左衛門にをいては手どりにせうする物をと  
9 てかけ出けるをかまだがたゝ今大将 軍のかけさせ

(五十四才)

1 給へき時には候はぬ物をとておりふさきけれ  
2 はちからおよはすあきのかみきよもりおほゐの  
3 みかとの西の門にをしよせて此門をはいかなる人  
4 のかためられて候ぞげんじかへいじか名のらせた  
5 まへ承候はんかう申はせんじの御つかひあきのかみき  
6 よ盛と名のる此門はちんぜいの八郎ためともと申  
7 ものがかためて候といへはあきのかみこはいかにさては  
8 こちなきものがかためなるごさんなれとてひかへ  
9 たりあきのかみがらうどうのうちにいせの國の  
(五十四ウ)  
1 ぢう人古市伊東武者かげつなしそく伊東五伊  
2 東六おやこ三騎其せい三十余騎にてちんぜい  
3 の八郎陣へをしよせて此門をはいかなる人のかた  
4 めさせ給ひて御やらんかう申はあきのかみのらうど  
5 ういせの國のぢう人こいちいとうむしやかかけつなか  
6 こいとう五いとう六とてあひちかに打よてひ

7 かへたりためともなんぢがしうのきよもりたにもあ  
8 はぬてきと思ひ「マ」ふぞ其ゆへはへいけはくわんむのす  
9 へといへとも王孫はるか也げんじは清和の御すへ

(五十五才)

1 為朝まで八代にあたるまたくなんちにてきたは  
2 ず平氏のらうどうならばひきしりそけといふい  
3 とう五申けるは是こそ御ざうしの御ことは共おほ  
4 急候はねおなしらうどうとは申なから君にもしられ  
5 奉て候物をそのゆへはいせの國すゝか山の強盗の  
6 張 本をのゝ七郎をからめて名をこうたいにあげ  
7 て候かげつな也源平りやうかさうのつばさにて朝  
8 家の御まもりにておはしますなんの勝劣か候  
9 へきへいじのらうどうのげんしをいず源氏のら

(五十五ウ)

1 うどうの平氏をいさらんにはいくさにせうれつや  
2 候へき平氏のらうどうのはなつ矢は源氏の御身  
3 にたつやたゝすやとてよつひいてはなつまこ  
4 といせの國にてやはいたりけん日向まへそそれて  
5 引ためとも矢一もよからんてきにこそと思へと  
6 もなんぢかことはのきくわいなれば矢一ツあ  
7 たへんするぞ思出にせよとてさきほそをう  
8 ちくわせてよひいてはなつ伊東六がよろひの  
9 ひきあはせをつとゝをる矢かうしろにひかへたる  
(五十六才)  
1 伊東五かよろひのそてにうらかいてそたち

- 2 たりけるいとう六さかさまにおちぬいとう五かた
- 3 きにくびをとらせじとておちあひていとう六
- 4 か首をとてげりかげつなあきのかみのまへに參
- 5 ていとう六こそ御ざうしにいおとされまいらせて
- 6 候へきやつにはずいぶんさねよきよろひとそんじ
- 7 候てきせて候へは二重をとをり候だにもふしぎと
- 8 思ひて候へばうしろにひかへて候それかしかよるい
- 9 の袖にうちかいて候そや一人してよろひの二三

(五十六ウ)

- 1 りやうもきさらんには此人のまへはかなひ候はし
- 2 とそ申けるあきのかみなんでうさほとこの事はあ
- 3 るへき矢つぎはやく二の矢をいたるらんたゝし
- 4 是は先祖八幡太郎将軍三郎武教がすゝめ
- 5 にてかねませたるよろひ三りやうを木の枝にて
- 6 かけていとをしたりしものゝすゑなれはさる事
- 7 もやあるらんちたいがにしの門へむかへとのせんじ
- 8 を承すころなきものがかためたる門へむかひて
- 9 せんなしひかしの門へむかはゝやとの給ければ

(五十七オ)

- 1 思きりあるらうどう共はきたない事をのたま
- 2 ふ物かなと思ひて返事もせずひまあらはし
- 3 りあしをもふまはやと思ひたる郎等共はかし
- 4 こき御はからひたゝしひかしの門はにしの門かち
- 5 かく候時は同ものやかため候らんはるかにへたゝり
- 6 て候へは北の門へむかはせ給へとそすゝめけるちやく

- 7 し中づかさのしよう重盛申されけるはきたな
- 8 い仰をは承候ものかなゆみやとりのならひかたき
- 9 こはければ所がいかなればとてむかふたるぢんお

(五十七ウ)

- 1 しりそくやうや候へき重盛におゐてはこゝにてかは
- 2 ねをさらさんずるぞとてあかぢのにしきのひたゝ
- 3 れにさかもだかのよろひに蝶のすそかなもの
- 4 をぞうたりけるくろかげなる馬にしろぶくりんの
- 5 くらをひてぞのたりけるおもてにすゝみ出て
- 6 桓武天皇より十三代の後胤刑部卿忠盛が孫あ
- 7 き守清盛がちやくし中務少輔重盛生年
- 8 十九歳いくさは是そはしめなるとておめひてか
- 9 けいでたりあきのかみ大にさはきてあれあや

(五十八オ)

- 1 まちさすなとめよや／＼との給ひければ
- 2 らうどう共をしならへおりふさかりなどして
- 3 げる間ちからおよはずとゝまりぬあきのかみのら
- 4 うどうにいがの國の住人山だの小二郎惟行といふ
- 5 ものありすゝみ出て申けるは守殿はしりぞ
- 6 かせ給候共これゆきにをき候ては一引もひき
- 7 候まししはしとゝまりて見物し給へ殿ばら御
- 8 ざうしと一いくさしてみせ奉らんとてたゝ一騎とゝ
- 9 まりけりあまりに人のかうなるも中／＼おこが

(五十八ウ)

- 1 ましくぞ見えし誰かは見物せんととゝまるべ

- 2 きこれゆきかうことは出しぬされはとてひきし
  - 3 りぞくべきにもよはねはちんぜいの八郎のぢんへ
  - 4 うちよツたり此山田たはもとより分限ぶんげんもなきも
  - 5 の也けるがあきのかみのもとよりも一ぶんののおんお
  - 6 もえさりければかい／＼しきらうとう一騎もと
  - 7 もせずわうじやくなるとねりおとこ二人ぐしたる
  - 8 に申けるはさてもなんぢをとしころ心やすく
  - 9 めしつかひぬれどもぶんげんなきあひだ思出あ
- (五十九才)
- 1 てあたえぬ事こそいこなれなんぢもさこそお
  - 2 もらんされともしう／＼のしゆくえんあさから
  - 3 ぬによりかゝる時おりふしまてつきまとひてさい
  - 4 ごのありさまをも見つる事こそありかたけれ
  - 5 しがいはあひかまへてかくせよ又さいごのふるま
  - 6 ひをはなんぢせう人じんにたて人にもかたれよといへば
  - 7 此おとこはしうにもおとらぬかうのものなりける間あひた
  - 8 ゆみやとらせ給ふ人につき奉りしよりかゝるべ
  - 9 しと思ひまうけて候さうでんのしうにおくれ
- (五十九ウ)
- 1 奉りて又しうどりして候共とても身のくわほ
  - 2 うにて候へはたうじの躰たにてこそ候はんすらめ身
  - 3 の事はさてをき候ぬなに事の思出もわたらせ
  - 4 給候はねともゆみやとらせ給ふならひとて御いの
  - 5 ちをすてさせ給ひ候はんする御事こそいたはしく
  - 6 もおしくも思ひまいらせ候へ共ちからおよび候はずさ

- 7 いごの御ともをもつかまつり候はんずるとてみつ
  - 8 つきにそとりつきける惟行これゆきはかちのひたゝれに
  - 9 くらかわおどしのよろひにくるつばの矢の廿
- (六十才)
- 1 四さしたるにぬりこめどうの弓のにぎりぶとな
  - 2 るにかわらげなる馬にくろくらをいてぞのたり
  - 3 けるものならねば何ものともかねてはよもしろ
  - 4 しめされ候はしほりかわのいんの御時因幡守平いなばのかみたいらの
  - 5 政盛朝臣まさもりのおせんじを給て前さきの對馬守源義親たけながのを
  - 6 追討つたうせし時かうみやうして名を後代こうたいにあげじ
  - 7 山田庄たのしやうじ司行秀ゆきひでが孫山田小太郎惟景これゆきしやうねんがちやくし
  - 8 やまたの小三郎惟行生年これゆきしやうねん廿八世に聞えさせ
  - 9 給ふ御ざうしを一め見まいらせ候はんとて是ま
- (六十ウ)
- 1 てこそ参りて候へとてあひちかにうちよツた
  - 2 り八郎ためとも程のものをかういふやツはてもとか
  - 3 おほえて返たうをもせはこゑにつきて一矢い
  - 4 ようとぞ思ふらんとてしころをかたふけてあ
  - 5 きのかみのらうどうの中にさるものありとはき
  - 6 きをいたりといひもはてねばこゑについてひ
  - 7 やうどはなつしやうじのいたをぬひさまにした
  - 8 たかにいつけたりしころをかたぶげずはくびのほ
  - 9 ねはあやうくぞ見えける其時ためとすこしも
- (六十一才)
- 1 さはかずあはれきやつは日本にっぽん一のかうのも

2 のかな矢ひとつもおしけれ共なんぢかことは  
3 のやさしければ矢一あたへんするぞたしかにう  
4 けとれよとて馬のかしらにあてゝひやうどは  
5 なツくらのまへつわはたといはりてよろひの  
6 まへうしろのくさすりつとゝをりしツつわに  
7 したゝかにいつけたりこれゆき惟行二の矢をつかひてひ  
8 かんとしけるがしたいに心とをくなりけるやらん  
9 ゆみをはからりとなげすてゝさかさまにお

(六十一ウ)

1 ちぬ高間たかまの三郎おちあひてくひをとツてげり  
2 とねりはしうにはをくれぬたちをぬきて大せい  
3 の中へはしり入たれども何はかりの事をかし  
4 出すへきなれば其中にてうツとられぬ下つ  
5 けのかみは二条がはらにひかへたりけるかこれゆき惟行か  
6 馬しうはいおとされぬいくさのちんをはしりま  
7 ிரりけるか下野しもつげのかみ守のせいの中へ出きたりければ  
8 かまだがあれ御らん候へはや御ざうしに人一人いおと  
9 されまいらせ候けり番匠はんじやうののみをもてうち候  
(六十二オ)

1 共是にすぎ候へきかおそろしのゆんぜいやとて  
2 おちあひけり下野しもつげのかみ守なんでうさ程の事は有  
3 へきをおくせさせんとてはかりことにぞしたるら  
4 む其ものはことしは十七か八かにぞなるらん其程に  
5 つのるへきかつくしそたちのものなればふねのな  
6 かかちだちなとは心へたるらん馬の上にてをしな

7 らへてくまんする事やはやばんどうのもの共に  
8 まさるへきいてさらは八郎ちやうにてなみゝせんとて  
9 かけ出られけるをかまだがたゝ今大将しやうぐん軍のかけさ  
(六十二ウ)

1 せ給へき所にては候はぬ物をとておりふさく間ち  
2 からおよはすかまだ事のてい見候はんとて卅きばか  
3 りにてをしいよせて此門をはいかなる人のかためさせ  
4 給ひ候やらんかう申ものは今日の大將しやうぐん軍下野しもつげのかみ守  
5 殿御めのとかまだの次郎まさきよとなるる八郎  
6 さてはなんぢは一家いっかのいゑの人ごさんなれ下野しもつげ  
7 守殿のむかはれたらほしさいは申へしかまたな  
8 らは人ゝじゝひきしりそけといへはかまたあざ  
9 わらてまことに日ころは一家いっかのしう今日ちよくめ  
(六十三オ)

1 いをそむき給ひ人逆さやくの凶徒けうとにておはします郎ちやう  
2 等どうのはなつ矢はしうの御身にはたつやたゝずや心  
3 見給へとてよひいてひやうどはなつためともかま  
4 だをみるとふりあふぎたるひたりのかほさきに  
5 すこしあたてかぶとののはちつげのいたにしたゝ  
6 かにいつけたりためともあまりのねたさにたう  
7 の矢をいるにおよはす矢をはかひかなぐて打すて  
8 て弓をわきにはさみてどりの余次よじはないか  
9 まさきよあますなをのれはいつくまでとて  
(六十三ウ)

1 おつかけたりかまだが三十騎きちんぜい八郎ちやうの廿八



- 2 騎おふもにぐ「ぐ」字補入るも今をかきりとぞ思ひけるかま
  - 3 だはうしろにいかつちのおちかゝるやうにおほえて
  - 4 まへわにおぜみかゝりてむちをうちて三町ちやうはか
  - 5 りそにけたりける八郎ながおひせんなし判官はんくはん
  - 6 殿もとしよりておはしませはいくさはかなふまし
  - 7 あにの殿はらもくちこそきゝ給へ共かたきを
  - 8 ふせがうする事は大事そ門やふるらなとてひ
  - 9 きしりぞくかまだかわらをにしへこそ行ゆべかりし
- (六十四才)
- 1 かどもてこわかたきをのちんへひかん事
  - 2 いかゝと思ければかわらをくだりに三ぢやうばか
  - 3 りそにけたりける京きやう極ごくをのほりにうちまは
  - 4 り下つけ殿のまへに参りてあなをそろしや
  - 5 あふないめにこそあふて候つれ御ざうしに矢一
  - 6 いかけまいらせて候つればあまりのねたさに
  - 7 や手どりにせうとおつかけられまいらせ候つる
  - 8 かうしろにいかつちのおちかゝるやうにこそお
  - 9 ほえ候つれいちあしの馬にのり候はすは世中今
- (六十四ウ)
- 1 はかうにて候つるそやとてもてのほかにごお
  - 2 それける下野しもつけのかみ守まもなんでうさ程の事は有へ
  - 3 き八郎とおもひておくしてぞさはおもふらんと
  - 4 その給ひけるそも／＼今夜こんやのとらの一天に内裏
  - 5 をまかり出たれ今日は十一日さしあたりたる日ふ
  - 6 さがりなり其うへあさ日にむかひ奉りてゆ

- 7 みをひかん事おそれあり方をたかへんと思ふぞと
  - 8 て京ごくを下へ三条でうまであゆませ三条ひがしを東へ
  - 9 かはらをうちわたり東のつゝみをのほり北殿ほくてん
- (六十五才)
- 1 を北に見なして大炊御門おほいのみかどのにし門へそをし
  - 2 よせたる此門をはいかな「る」人のかためられて候そ
  - 3 かう申はせんじの御つかひ下野しもつけのかみ守源まも義朝よしもととな
  - 4 る同おなじ氏鎮しぢん西八郎さいはちらう為朝ためあそと名のる下野しもつけ守よしと
  - 5 もなんどかせんじの御つかひとてむかふたらはた
  - 6 めともなとはひきしりぞけかしあにゝむかツて弓
  - 7 をひかはみやうがのつきよう事はしらぬかといへは
  - 8 ためともあさわらてあにゝむかひて弓をひかん
  - 9 する事のみやうがのなからんには殿どのはげんざいの
- (六十五ウ)
- 1 ちゝにむかひて弓を引給ふ事はいかに殿どのはせん
  - 2 じの御つかひとかうし給ふはんぐわん殿はいむぜん
  - 3 の御つかひにておはしますせんじもゐんぜんもな
  - 4 にのせうれツか候べきとぞ申ける下野しもつけのかみ守馬まの
  - 5 上うへことがらかぶとのきやうあつはれ大しやうぐんや
  - 6 とそ見えたるうちかぶとのしる／＼と見えければあ
  - 7 はれいよげなる物かなたゝ一矢にいいおとさんとと思て
  - 8 さきほそをうちつがふて矢はずをとてすでに
  - 9 ひかうどするがためともきと思ふやうこんとのいく
- (六十六才)
- 1 さはやうあるごさんめれ主上しゅしやうと皇みかどと申は御兄みやう

- 2 弟だい関白殿と左大臣殿と御兄弟ごえい也はんくわん殿
- 3 と下野殿と父子ふしされは判官殿はんくわん我は仙洞せんどうへま
- 4 いらんなんぢは内裏へ参れ内裏いくさにかち
- 5 給はゝ我一人を申てたすけよ新院しんいんいくさにかた
- 6 せ給はゝくんこうのしやうにも申かへてなんぢをた
- 7 すけんなどゝやくそくもや有つらんさもあらは
- 8 下野殿をいおとし奉らん事はちゝのためにもふ
- 9 ちうなりと思てつがうたる矢をさしはつすさ

(六十六ウ)

- 1 りなからも下野殿に矢かせをいかけ奉らんとて
  - 2 さきぼそをはゑびらについさしてかぶらをうち
  - 3 つかひて馬のかしらを引なをし矢はずをとて
  - 4 かぶらの上へからりと引かけてひやうどはなつ下つ
  - 5 けのかみかぶとのほし七ツ八ツからりといけつりてうし
  - 6 ろなる寶庄ほうしやう嚴院ごんいんの門もんのとひらのあつさ六寸すんば
  - 7 かりあるをかな物くはへてつとをるかぶらはくだけで
  - 8 こなたにさつとちる矢は籠のなかさきてぞとをり
  - 9 ける下野つげのかみ守かぶらのこゑに心ちをそんじてまへわに
- (六十七オ)
- 1 かゝりゆんつえにすかりて心ちをなをしてかふと
  - 2 をしつころひ弓とりなをしてさらぬやうにて八郎
  - 3 はかねてきゝつるにはにす手はあばら也八龍りゅうなん
  - 4 どをはやはやいるといひければ一の矢におめては存
  - 5 するむね候てしんしやくつかまつり候ぬ二の矢にお
  - 6 めては仰にしたがひ候はんくつけいづるばしりわき

- 7 たてのはつれいつくにも所はきらひ申まし御
  - 8 まへに候人ともをのけられ候へとてれいのさきぼそ
  - 9 をうちくはせて馬のかしらを引ひきなをしゆん手に
- (六十七ウ)

- 1 なしてうちあけてひかんとすれば下野つげのかみ守かみげに
  - 2 はかなはじとや思けんなにとなきやうにもてな
  - 3 してほうしやうごんいんの戸とひらのかけへ引しりぞ
  - 4 くむさしさかみのもの共かけよやとそげぢしけ
  - 5 る其時さかみの國のぢう人大おほばの平太へいたかけよし同おなじし
  - 6 三郎すらうかけちかとおめいてかけ出たり八郎須藤すだう九
  - 7 郎らうをまねいて東國とうこくには此もの共ははちあるもの
  - 8 ぞためともがゆんぜいのほとをみせばやと思ふ征そ
  - 9 矢は物にとをる事かあまりにねんなきにかぶら
- (六十八オ)
- 1 にていはやとおもふはいかに須藤すだう九郎くわうよくこそ候はめ
  - 2 と申せばかぶらをうちつかひてばんどうにさ
  - 3 るものありとはきゝおよびたり此門もんへむかはゝさだ
  - 4 めて矢一はのそみあるらん一あたへん後生ごじやうのうた
  - 5 へにせよとて馬のかしらを引なをしゆんにな
  - 6 してうちあけてするりと引けるに何とかし
  - 7 りけん馬がたちなをりてめてへくるりとまはり
  - 8 ければゆんでへをしもぢれはかふとのてさきに
  - 9 つるがかせうて思ふ程はひかねともひやうとは
- (六十八ウ)
- 1 なつ大へいたばの平太へいたがめてのひざぐちかたてきりに

- 2 あふみのみつをがねかけて馬のおりほね四五まい
- 3 いいきりて矢はつとぬけて土につばとたちたり
- 4 馬はひざをおりてどうどたうれければ大ばの平太
- 5 さかさまにおちけるをおとゝかげちかつとよりに
- 6 かに引かけてかたゝへたちのきたりけるを
- 7 ためとも馬のかしらを引なをさんとする程にこ
- 8 れをはしらでいはつしたると心へてふしきの事
- 9 かな矢所と思ふ「ふ」字補入」てはなつ程にては此程物をい

(六十九才)

- 1 はつしたる事はおほえぬものをきやつは日
  - 2 本一のうんのものかなめはつかしきものにてあつ
  - 3 る物をためともは手はあばらなりとこそ人に
  - 4 はかたらんすらめやすからぬものかなとぞつぶ
  - 5 やきけるかげちかあにをたすけんとして戸ある
  - 6 小屋をたゝけどもこたへずおせ共あかずあには
  - 7 しきりにたすけよといふ間とかうしてかわらへ
  - 8 出である小屋にをし入て我身はいくさにあはん
  - 9 とて出てゆかんとすれはあにはおとゝがよろひの
- (六十九ウ)
- 1 袖をひかへていかにわたのたゝ今こゝはいくさはにな
  - 2 らんずてきみたれ入たり共あしがかなはゝこそて
  - 3 きをもふせかうずれいぬしにをせうする事はくちお
  - 4 しき事ぞかしたとひ他人なり共なさけあらん
  - 5 人はたすくべきそかしかいかにこゝにすてをかんとは
  - 6 し給ふそといふぢたい兄弟中あしかりけるがおり

- 7 をゑておとゝがあにゝいふやういかに日比はにくしとお
  - 8 ほせられつれ共景親にこそたすけられ給ふめ
  - 9 れいみじとおほせられしよその人誰かはせんど
- (七十才)

- 1 にあひ奉るといへはあにをめゝといふやう日ころ
  - 2 はなにとなく人の申に付て内とうち見奉る事
  - 3 もありつれとも今よりのちはわたのにすぎたる
  - 4 ほうこうの人あるべからすといふあひた此うへはちか
  - 5 らおよはずと思て大庭平太は廿七三郎は廿五に
  - 6 ぞなりけるがあにがよろひもぢうだい也わがよろ
  - 7 ひもいのちにかへておしければぬぎもせずぬがせもせ
  - 8 で大炊御門かはらより平太をかきをふてそのあひ
  - 9 た二所にていきをやすめつゝ山しなまてそのびにけ
- (七十ウ)
- 1 る其のちむさしの國のぢう人かねこの十郎家
  - 2 忠くるかはおどしのよろひきてあしげなる馬にく
  - 3 ろくらをきてぞのたりける生年十九さい軍は
  - 4 是こそはしめ也とてかけ出たり鎮西八郎是を見
  - 5 てかねこの十郎と名のるやつはさし出たるやつかな
  - 6 きやつを一矢にいをとさん事はやすき事なれ共
  - 7 それもあまりに無念におぼゆるぞ我と思もの
  - 8 あらはてきの見うまへにていけどりにせよとの
  - 9 給へはたかまつの四郎が承候ぬとておめいてかけ出た
- (七十一才)
- 1 りかねこをしならべてひツくんで二ひきが中にど

- 2 うどおちたりたかまは三十余よの大のおのこのしたゝ
- 3 かもなりかねこは十九になるむげなるわかき物共何
- 4 とかしたりけんたかまをとツておさへてうへにのり
- 5 いて左右さうのよろひの袖をふまへたるあひだたかま
- 6 はちともはたらかずあにたかまの三郎さうらうか是を見
- 7 ておとゝをうたせじとて馬よりとんでおりかねこ
- 8 をうたんとしけるところをかねこたかまの三郎かか
- 9 ふどのしころを引あけて三かたな四かたなうしろ

(七十一ウ)

- 1 へとをれとさゝれてどうどたうれぬ(以下、つづく。)

(広島大学日本語史研究会)